

青少年アンビシャス運動100人委員会発足式 麻生渡知事の趣旨説明

平成12年2月5日（土）

ホテル・ニューオータニ博多（芙蓉の間）

皆様方には、福岡県の青少年アンビシャス運動 100 人委員会の委員にご就任をお願いしたのでございますが、それぞれご承諾をいただき、そしてまた今日はご出席をいただきました。心から御礼を申し上げます。この委員会の会長に、私ども日頃から大変敬愛いたしております江崎玲於奈博士にご就任をいただいたわけでございます。特にこのお忙しい中、福岡まで来ていただきました。心から御礼を申し上げる次第でございます。

皆様方は、私どもの次の時代を託します青少年の健全な発展、そのためにそれぞれの分野で大変な活躍、活動をいただいております。本当に地味なご努力をいただいているわけでございます。日頃の皆様方の活動に対しまして、心から御礼を申し上げる次第でございます。

今回、青少年アンビシャス運動を福岡でスタートさせたい、ということで提唱申し上げたわけでございます。なぜ、私がこのような運動を始めなければと考えたのか。一つは、もう少し青少年の諸君が、努力する、伸びる。そのような伸びていく子供たちを誉め、賞賛し、自信を与えていくということが非常に大事だと痛感したわけでございます。私は知事になりまして、教育問題が大変でございました。イジメの問題から始まりまして、自殺、あるいは不登校。最近では、学級崩壊ということで授業が思うようにできない、多くの問題があります。学校の先生方も本当にご苦労されておられる。その中で、なぜこうなっているのかということについて、私なりに色々考えてみたわけでありまして。色々な原因があるわけなのですが、一つは、どうも(学校が)面白くない。子供たちが何か前向きに、積極的にやっつけていこうという意欲に欠けているのではないかと。なぜ、そうなったのであろうか。これはやはり、それぞれの子供たちの力、それを積極的に、前向きに伸ばしてやる、それをしっかりほめてやる。そういうことをやらなければ、無気力な子になってしまう。

今は、学校の中でほとんど行われているわけではありませんけれども、判り易く申し上げますと、運動会の時にかっこをする。そのかっこはゴールの時には差がないようにしてしまう。ということが一時期あったわけでございます。差をつけたのでは足の遅い子が可哀想じゃないか、ということなのですね。これでは、足の早い子はもっと速く走ろう、そして足の遅い子はもっと頑張らなきゃいけない、あるいはかっこではだめだから他のことで頑張ろう、そういうような動機が働いてこない。子どもは違った能力を持っているわけですから、それを伸ばしてやろうということでないで、一所懸命前向きに努力する力が沸いてこない。よく言われますが、ちょっと私どもは結果の平等をやり過ぎたのではないかと、考えたわけでございます。

余談になりますが、私どもの年代になりますと、同窓会をよくやります。

よく昔話をするわけなんです、お前はよく勉強ができたけれども、俺は運動会の時のリレー選手だったとか、勉強はできんやっただが、自分は皆勤賞だった。それを秘かに誇りに思っている。誇りに思うことで、それが人生の中で自分の大きな支えになっている。自信になっている。それが人生の困難な問題に、立ち向かっていく力になっている。それがよく判るのです。そういう点を考えますと、私どもはもっと子供たちを、それぞれの力、能力を伸ばす努力をもっと奨励する。意欲を持って目標に取り組む。そしてその成果に対して率直にほめる、というようなことをやらなきゃいかんのではないかと。そう痛感しているわけでございます。

その意味で、今回の運動に「アンビシャス」という名前を付けたのです。託す気持ちは、自分で何かやりたい、それぞれ目標を作る、それに向かって努力する。中身はそれぞれ違うわけですが、それぞれの希望抱負を持ってやる。それこそアンビシャスである。ということでこのような名前を付けたわけです。

二番目に、今後それぞれの子供たちが得意技を持つということが、非常に大切になってきたことを痛感いたしております。今、社会は大変な勢いで変わっているわけです。例えば、雇用形態も非常に多様化致しまして、今までのように終身雇用、年功序列ということで、一つの所に就職したらずっとそこで勤めることが少なくなりつつあります。しかもどんどん国際化しております。そうなりますと、今までのように学歴、あるいは肩書き、そういうことでその人の価値が決まっていくのではない。自分は何ができるのか、どんな得意技を持っているかこそが大切になってくる。特に私は今回の委員会は経済界からの方のご参加もお願いしました。経済界の方からは社会の求める人材像が非常に変わってきている。そのことについてどんどん情報を流していただきたいと思っている次第でございます。

そして国際化ということになって参りますと、私どもの子供たちの知力、体力あるいは色んな人間的な魅力という点におきましても、広く世界の子供たちに負けないものを身につけなければならない。国際的な競争力というものを持っている青少年を育てていかななくてはならない。そういう意味でも、子供たちが色んな分野でしっかりと自分の得意技を持っているのがいかに大事であるか、特に痛感しております。

そして三番目に、いよいよ2002年から学校は週2日休みになります。今までの学校教育が知識をたくさん教えるということで、忙しく余裕がなくなっている。そこで、教える知識の量を相当減らそう。減らして、それぞれの家庭にお返ししますから、親子の対話ももっとして下さり、色んな子と遊んだり、勉強ばかりでない幅広い子供を育てていこうと考えているわけです。しかし、そのような理想がうまく実現するのかということになりますと、子どもを受け取る地域、それぞれの家庭がしっかりしなければいけません。下手をしますと、せっかくの土曜日が家に閉じこもってテレビを見たり、ファミコンばかりする。ひょっとしたら塾に一所懸命行くようになるのかもしれませんが。それでは何のためにこの2日を休みにしたのか、意味がなくなってしまう。今までのように何でも学校だのみでは済まされない。本当に学校の先生方は、イジメ問題は特にそうですが、非常に困難な状況の

中で努力されています。今度は家庭が、しっかりしなければなりません。地域、家庭が、週休 2 日になれば益々大事になる。そういう時代でありますから、もう一度学校と子どもの地域社会、あるいは家庭を見直していくことが不可欠であると考えたわけでございます。

子どもは 21 世紀を迎えるわけですが、本来どんな子育てをするか、どんな方法でどんな内容の教育をするのかは私たち社会の最も重要な仕組みです。今日も新聞にございましたけれども、どういう年齢のどんなしつけをするのか、そういうものをしっかり持っているのが社会の原点です。ところがどうも子どもはその所を見失っているのではないかと、という感が深くいたします。

学校の先生方と一緒にしまして、子どもの家庭、あるいは地域、そしてあるいはまた企業力を集めて、今後の子どもの立派な青少年の育て方、教育の問題について、ぜひこの際、公論を起こしたい。教育公論を開始したい。現状、課題、その課題に対してどのような考え方、どのような理念で子どもは対処していくか。具体的に何をすべきか、運動の方法、こういうことをひとつ 100 人委員会で大いに議論をしていただきたい。

約 1 年間にわたりまして、多くの県民の意見もいただきながら議論を活発に我々の今後向かうべき方向を見つきたい。100 人委員会の皆様にその先頭に立っていただきたいわけです。どうか、大変お忙しい中でございますけれども、よろしくお願いを申し上げます次第でございます。